
昼のアタシと夜のキミ CASE of SHIN

serena

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昼のアタシと夜のキミ CASE of SHIN

【コード】

N9735G

【作者名】

serena

【あらすじ】

嘘偽りで装飾されたこの街で、あたしは飾りつけのない真っ直ぐな恋をしました。

Her mes (前書き)

この小説は作者の実話が元になっていますが、全てが実話というわけではありません。

記憶の曖昧なところもあるし、自分の記憶の中にだけしまっておきたいものも沢山あるからです。

それを承知の上、読み進めて頂ければ幸いです。

そして、作品を書き上げるまでにどれくらいの時間が掛かるか、正直わかりません。

それでもなるべく素直な文章で書き終わる事が出来るよう頑張ろうと思います。

H e r m e s

あれは去年の3月。

高校の卒業を控えた私は友達に誘われて歌舞伎町に足を踏み入れた。

「ねえどこ行くの？」

「ホスト！」

なんのためらいもなくそう言う芽依。

「ホストって・・・あたしたちまだ一応高校生だよ？」

「18歳から入れるから中卒でフリーターしてるって言えば大丈夫だよ？」

「大丈夫って、そう言う問題じゃなくてさ。」

「平気平気！あたしいつも行ってるし！」

芽依とは中学の頃からの友達。

始めはただのメル友だったけど、直接会って遊ぶようになってもう4年になる。

出逢った頃はいじめられっ子で弱かった芽依は、中学の卒業が近くなった辺りから別人のように変貌した。

見た目も派手になったし、強気な姉御肌タイプになった。

何があったのは聞かないけれど、芽依は前にふと

「あの頃のあたしを知ってるのは家族と利奈くらいだよ。」

と、独り言のように呟いた。

結局彼女は今も弱い。だから過去の自分を知っているあたしを側に置いておくんだと思う。

本当の自分を知っている人がいなくならないように。

「やっぱあたし帰って良い？」

いくら芽依の付き合いとは言え暗い世界にはなるべく足を踏み入れたくない。

「はあ！？利奈ちゃんは芽依ちゃんを夜の歌舞伎町に一人置き去りにするのですかっ！」

「夜ってかまだ夕方だし・・・いつも行ってるって自分で言ってたし・・・」

「ああもうごちゃごちゃうるさいなあ！利奈はいつも真面目すぎるの。いいじゃん初回だからお金かかないし。」

「だからそう言う問題じゃ・・・」

ドンキからコマ劇場へ向かって伸びるセントラルロードで口論する

あたし達に1人の男が声をかけてきた。

「お姉さん達なにしてんのっ?」

「喧嘩」

最高にキマった笑顔でさらりと言う芽依にあたしは思わず笑ってしまった。

「あ!友達笑ってる!ってことで仲直りい。じゃ、仲直りついでに飲みにでもいこっか!」

「いくいくう!」

男の軽いノリに即座に順応する芽依。

「行きません。」

「お友達ノリワルツ!」

「ノリワルツ!」

なぜか2人はもう打ち解けてる。

口元の可愛らしい芽依の好みの顔だからだろうか。

「ノリ悪くて結構。芽依だけ行ってくれば良いじゃん。」

「やだよお、あたしは利奈と行きたいのぉ。」

「俺も皆で行きたいのお。」

2人はほっぺたを膨らましてこちらを見る。

「行きません。」

「やだやだやだやだやだやだやだあ!」

しゃがみ込んで泣きまねをする芽依。こうなると芽依は本当に面倒臭い。

「ほらあメイちゃん泣いちゃったあ!」

今日はもう一匹いるから尚更面倒臭い。

「わかったわかった、行けば良いんでしょ行けば!」

「やったあ!」

泣き真似をしていた芽依はぴょんっと飛び上がった。

初めて行くホスト。

違いはよくわからないけれど、今日行くのはホストクラブではなくメンキャバって言うらしい。

「ホストはフリータイムで永久指名!メンキャバは時間制で指名替えもオツケー!」

いや、そう言われてもよくわかりません。

「2人面白いから今日は俺の奢りね。あ、俺の名前雄馬ね。」

男はそう言つとエレベーターの中で4000円を手渡した。

『CLUB RUBY』

黒地にゴールドで店名と女性のシルエットが描かれたお店の看板。

それと同じ配色の重々しい扉を雄馬と名乗る男が引く。

頭に響く騒がしいトランスと人の声。

「いらつしゃいませ。」

ホストのイメージとは似つかない黒髪モデルっぽい男性があたし
たちを迎え入れた。

「初回のお客様ですよ、申し訳ございませんが身分証のご提示だ
けお願い出来ますでしょうか。」

「はいはい。」

芽依は得意げに偽造の大学の学生証を取り出す。

そんな物まで作って・・・あたしは半ば呆れながらも自分の保険証
を見せる。

「えつとそちらのお客様は18歳。まだ学生さんですか？」

「いえ、フリーターです。高校には行っていないので。」

芽依に言われた通りに答える。

「そうですか、失礼しました。ではお席にご案内します。雄馬さん、C2。」

「はあい、C2ですねい。・・・2名様ご来店です！！」

『いらっしやいませ！！』

ずっと響く様な男達の声。ああ、やっぱり来なければよかった。

何人かのホストが入れ替わり立ち替わり、名刺を差し出し、在り来たりなトークやゲームをして席を立った。

あたしが明らかに帰りたいオーラを出しているせいか、芽依が通いなれてるオーラを出しているせいか、将又その逆かは分からないけれど、だいたいどのホストも芽依に話しかけ、芽依を中心に盛り上げる。

芽依はすっかりお酒も回り、ちやほやされて上機嫌。

帰りたい帰りたい。

そんな時に彼が現れた。

「失礼します。お手前よろしいですか？」

ハスキーでよく通る声だった。

黒のスーツに清潔そうな白いシャツ。細めのネクタイに品の良いエルメスのベルト。

他のホストのように髪をこれでもかと派手にしたりせず、色素の薄い細い髪を真ん中でわけ自然に後ろに流している。

入口であたしたちを招き入れてくれた男性以上にこの場所に似合わない、というか明らかに浮いている彼は姿勢良く椅子に座るとあたしを真っ直ぐ見た。

内ポケットからシンプルなシルバーの名刺入れを取り出すと両手で丁寧に名刺を差し出す。

「Shinnです。って、俺なんか笑われてる？」

「・・・だって、その名刺の渡し方。サラリーマンみたい！」

「うわ、それこの前も言われたんだよね。やっぱり昼職してるとバレるか。」

「昼職？」

「うん、俺昼間は不動産屋さんだから。」

「で、ホストもしてるの？」

「うん。って言うってもまだはじめて10日くらいだけどね。」

Shinnは明らかに他のホストとは違って普通の人って感じだった。

Her mes (後書き)

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

更新頻度は未定ですが、なるべく頻繁に更新出来るよう頑張りますので、評価や感想など頂けると嬉しいです。

Shinと私の物語は、今この瞬間も続いています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9735g/>

昼のアタシと夜のキミ CASE of SHIN

2010年10月19日14時39分発行